

自治体との包括連携協定による連携事業（第2報） - 水巻町における「九女型人材育成プログラム」の実践

西田真紀子（九州女子大学）

Keyword： 地域連携、課題解決、実践教育

【背景】

九州女子大学・九州女子短期大学（表1）では、「地域に根ざした実践教育を展開する大学」として、平成27（2015）年6月1日に地域教育実践研究センターを設置し、「学生の質保証の強化」、「大学の教育・研究機能の活用」および「地域社会との共生」の3本柱を軸として、本学の地域貢献（型）による大学創りに取り組んでいる（図1）。

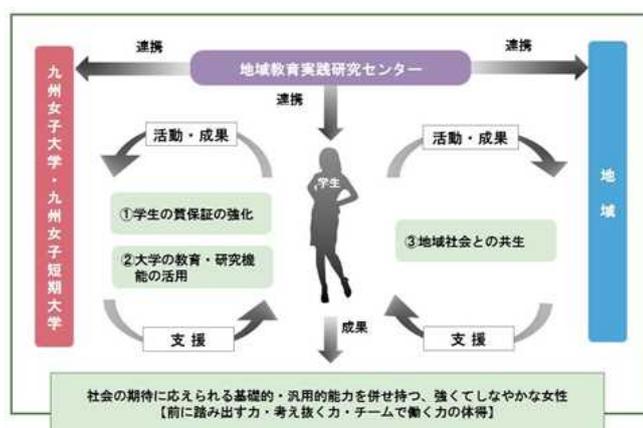


図1 地域教育実践研究センターの役割

九州女子大学家政学部人間生活学科（以下「本学科」）は、定員40名の小規模学科である。本学科では、地域教育実践研究センターの取り組みと連携したPBL型授業を必修科目として開講している。地域生活学演習Ⅰ（1年）→地域生活学演習Ⅱ、Ⅲ（2年）→地域生活学演習Ⅳ、Ⅴ（3年）→地域生活学演習Ⅵ、Ⅶ（4年）という連続した必修科目である。

地域貢献には「教員が中心となって地域に関わる場合」と「学生の学修の場を兼ねて地域に関わる場合」があるが、この一連の必修科目の中で地域連携と実践教育のバランスを模索している。

現在のカリキュラムにおいて、地域生活学演習Ⅰで九女型人材育成プログラムオフキャンパス研修を行い、チームでの議論、意見交換の方法、役割分担の大切さなどを体験し、2年次以降に行う実際の地域活動にスムーズに取り組めるようにしている。

オフキャンパス研修のテーマは連携協定を結んでいる地域を題材とし、テーマに関する資料を2年生が収集・提示する。1年生はジグソー学習で資料を読み込み、KJ法とブレインストーミングを用いて資料からの課題発見、課題解

決に向けての提案を作成しプレゼンする。

2年次から行う実際の地域活動では、近隣の学童保育ボランティアや地域活性化への取り組みなど様々な活動場所の中から学生らの希望に応じて選択し、その活動において、大学生としてどう立ち振る舞うか、活動メンバーの中でどう役割分担を行うかなど関わり方を考え行動する授業と位置付けている。1つの活動にあまり大人数で関わらないようにするために、なるべくたくさんの活動を準備し、自分の役割が与えられるよう工夫している。

第1報では、本学の近隣地区であり平成28（2016）年に地域連携協定を結んだ福岡県遠賀郡芦屋町をフィールドとし、本学科において行っている九女型人材プログラムの実践を中心とした自治体と学生による連携事業に関する事例を報告した。

表1 九州女子大学・同短期大学の基本情報

		学部・学科(専攻)	取得可能免許・資格(抜粋)
九州女子大学	家政学部	人間生活学科	中・高教諭一種免許「家庭」 二級建築士受験資格
		栄養学科	栄養士免許 管理栄養士国家試験受験資格
	人間科学部	人間発達学科 (人間発達学専攻)	幼稚園教諭一種免許 小学校教諭一種免許 特別支援学校一種免許 保育士
		人間発達学科 (人間基礎学専攻)	中学校教諭一種免許「国語」 高等学校教諭一種免許「国語」「書道」 図書館司書
			1,263名
同短期大学		子ども健康学科	幼稚園教諭二種免許 養護教諭二種免許 保育士
		専攻科	養護教諭一種免許
			279名

その後、地域との連携事業を必修科目で行うにあたり、「学生のモチベーションの維持」と「時間の確保」の2つの課題が浮上した。地域貢献やボランティアなどに関心を全く示したことのない学生や、指示が少なく主体性を求められる活動に消極的な学生も少なからずいる中、学生らがかわる活動が、地域にとって有意義な結果をもたらし、且つ、学生にとって効果的な社会人基礎力の醸成となるような組織づくりと授業計画を模索してきた。地域活動を行うにあたり、その地域活動の意義や目的などの理解が不十分なまま取り組んだり、課題発見や情報発信のスキルがない状態で進めたりすると、参加することのみが目的となり、

主体性を育む効果が薄い。また、適切な議論の進め方を経験しないまま活動を行うと、役割分担が上手くできない傾向にある。

今回は、新たに平成 31 (2019) 年に地域連携協定を結んだ福岡県遠賀郡水巻町をフィールドとして九女型人材育成プログラムを実践した連携事業について報告し、単位化した授業の中での実践教育の効果と地域連携のあり方について検証した。

【実践方法・実践内容】

水巻町は北九州市の西に位置し、一級河川・遠賀川下流に沿った縦長の町である (図 2)。梅雨や台風の時期になると浸水被害が起きることから、住民の防災意識の向上を 1 つの課題としている。

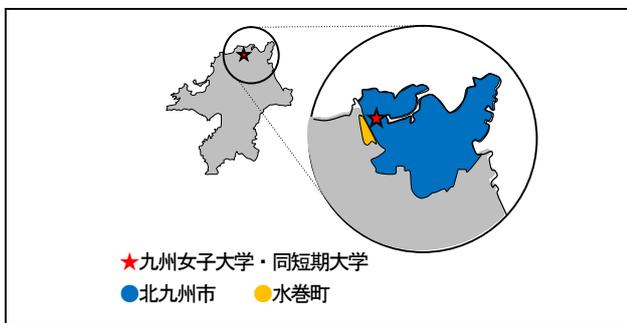


図 2 本学と自治体の所在地

本学科では、水巻町の依頼を受け、令和 2 (2020) 年度地域活動の 1 つとして始めた。活動の到達目標は「水巻町の『指定避難所のレイアウト』と『住民の避難』について考える」とした。活動人数は 3 年生 5 名、2 年生 14 名、1 年生 42 名であった。それぞれの分担として、3 年生は「レイアウト案の取りまとめと作成」、2 年生は「指定避難所の課題と分析、レイアウト案の構想」および「住民避難に関する資料収集」、1 年生は「水巻町住民の避難についての提案作成」とした。また、役割として、3 年生は 2 年生グループのリーダー、2 年生は 1 年生のファシリテーターを設定した。

活動期間は令和 2 (2020) 年度前期および後期 (4 月～2 月) であったが、福岡県は 4 月 7 日に緊急事態宣言の対象区域になり、新型コロナウイルス感染症対策として大学内の講義、演習、実験、実習科目のすべてが遠隔授業で行われることとなった。7 月からの対面授業が決定した 6 月 15 日にスタート日を設定し、水巻町役場の職員 (以下役場職員) による講義を Web 開催した。

【実践結果】

Web 講義は、90 分で開催され、2, 3 年生計 19 名が受講した。役場職員からは、市町村が防災・減災に取り組む

意義や近年の水巻町の取り組みが紹介された。また、長期的に避難所を解説・運営したことがないこと、職員のマンパワーが十分でないこと等が課題として提示された。

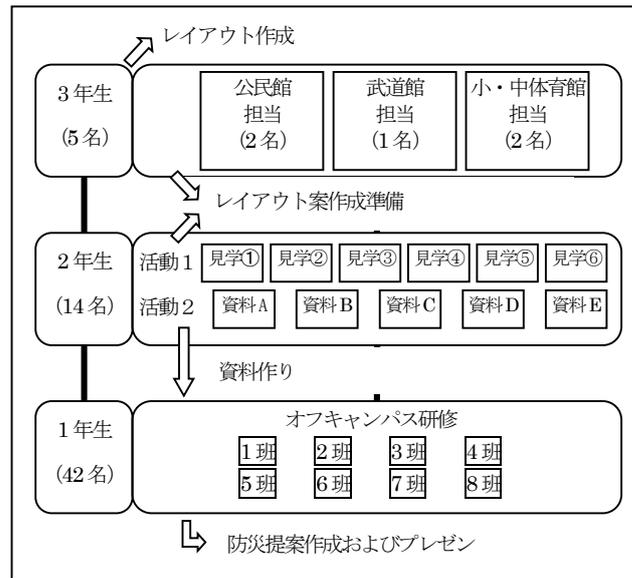


図 3 水巻防災に関する活動の状況



写真 1 Web 講義

その後の活動スケジュールを表 2 に示す。

表 2 令和 2 年度の大学及び活動スケジュール

日時	大学の状況	活動内容
4月	入学式中止・大学閉鎖	
5月	授業開始断念・遠隔授業開始	沿革による活動場所は位置決め
6月	7月からの対面授業準備	6/15 遠隔による講演
7月	対面授業開始	7/27～ 指定避難所視察開始
8月	演習科目特別講義あり	
9月	演習科目特別講義あり 中旬：後期開始	～9/1 指定避難所視察終了
10月		10/15 指定避難所視察報告会
11月		
12月		1年生オフキャンパス研修・発表会
1月	緊急事態宣言発令 成績評価終了	避難所レイアウト途中経過提出

提示された課題を具体的に知るために、2 年生は 6 つのグループに分かれ、町の指定避難所 17 ヶ所を役場職員の案内のもと視察した。視察後、それぞれの指定避難所運営時の課題とレイアウト構想をグループ単位でまとめ、10 月に報告会を行った。その結果、①「小・中学校体育

館」②「武道館・体育センターなど運動施設」③「公民館・福祉センターなどの一般交流施設」の3つの施設群に分類し、課題やレイアウト構成をまとめ(表3)、今後のレイアウト及び、指定避難所にあるもの、あるべきものおよび避難所へ持参すべきもののリストについて検討していく方向性を確認し、2年生を3つのグループに改編した。

3年生は、それぞれの2年生グループに分担して入り、リーダーとして2年生の提案を聞き取りながらまとめ、1つのレイアウト案を作成した。レイアウト案をまとめるまでの検討結果およびレイアウト案の図を役場職員とメールおよび電話でやり取りしながら、1月に今年度の最終報告を紙面にて行った。



写真2, 3
指定避難所視察の様子



表3 学生が提示した報告書

	課題	レイアウト構想
公民館	<ul style="list-style-type: none"> 床が固いため、マット等が必要 温度調節(冷暖房管理) どこに何があるか分かりにくい コンセントが少ないため、延長コードが多数必要 大ホールは音が響きやすい ホールと会議室があるので使い分けが可能 トイレの定期的な点検・掃除が必要 	<ul style="list-style-type: none"> 幅広い年代に分かりやすいレイアウト 狭い部屋を妊婦、高齢者の方等に分けて使用
小・中学校体育館	<ul style="list-style-type: none"> 入口にスロープが無い 入口が狭いことから混雑する可能性がある。別の入口を解放する必要あり 温度調節(冷暖房管理) 日差しが強いため、カーテンが必要 床が固いため、マット等が必要 プライバシーを確保する場所の区切りが必要 換気がしにくいいため、サーキュレーターが必要 コンセントが少ないため、延長コードが多数必要 定期的な点検・掃除が必要(トイレ環境悪い) トイレの清潔を保つアルコールや掃除道具が必要 校舎内のトイレも開放したほうが良い 体育館の場所がわかりにくいいため、目印が必要 窓から川が見えるため怖いと感じる。できれば他の避難所から開設 	<ul style="list-style-type: none"> トイレ付近は高齢者等動きづらい人 体調不良者専用スペース 駐車場が広いいため、車中泊も視野に入れる
体育館・武道館	<ul style="list-style-type: none"> 高齢者のために腰かけて待機する場所が必要 夏は換気のためにも扇風機 プライバシーを確保する場所の区切りが必要 着替えるスペースあり 床が固いため、マット等が必要 日差しが強いため、カーテンが必要 トイレの清潔を保つアルコールや掃除道具が必要 定期的な点検・掃除が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ステージは物置き 椅子は、足腰の悪い人用 区切りが必要 快適を求める

2年生は、役場職員による講義と指定避難所視察での気づきをもとに、1年生のオフキャンパスのテーマを「水巻町の防災を考える～避難者の立場から～」と決定し、テーマに沿った資料収集を行った。収集した資料を「A:コロナ禍での避難」「B:災害事例」「C:災害の備え」「D:避難所に関する情報」「E:避難タイミング」の5つのテーマに分類し、ジグソー学習の資料としてまとめた。また、研修中は、1年生チームをファシリテートした。

1年生(42名)は、約5人を1チームとし、終日利用して、A～Eの資料を用い、課題発見、解決提案をプレゼンテーション資料にまとめた。発表時間は7分とし、学科内教員および他学科教員、資料を作成した2年生、地域教育実践研究センターの教職員、役場職員(3名)の前で発表を行った。

【考察・今後の展開】

今回は、17ヶ所の指定避難所の見学後に作成した課題

および近年指定避難所として開放した実績のある公民館のレイアウト案作成の途中経過について水巻町役場に報告した(図4)。これは、目標の報告内容に達成していない。連携事業ではもっとスピード感のある授業展開とし、余裕をもって目標とした報告内容を期日内に仕上げることができる内容にする修正が望まれる。1年生のオフキャンパス研修のテーマとして水巻防災を取り上げたことは、学生の防災意識が向上したこと、近隣地域の防災に対する意識を知ることができたこと、役場職員が、学生が防災に関してどのようにとらえているのかを知ることができたことが、今後につながる良い結果となったと考える。

コロナ禍で例年より活動量が少なくなりましたが、一定の報告が評価され、次年度も水巻町と新2、3年生が防災の観点から連携活動を行うことが決定した。

【引用・参考文献】

- 九州女子大学・九州女子短期大学地域教育実践研究センター，令和2年度地域連携事業報告書
- 澤田小百合，2018，自治体との包括的地域連携協定による連携事業 - 芦屋町における「九女型人材育成プログラム」の実践，第10回大会要論文集，p347-348
- 西田真紀子，大学生の学外活動による学習成果 - 九州女子大学人間生活学科の授業内における地域活動の効果 - ，第10回大会要論文集，p349-350
- 澤田小百合，2019，地域における実践教育の展開とSDGsの推進 - 大学と自治体との組織的な連携の実践，地域活性化学会第11回大会論文集，p357 - 358



写真 4.5 7分間のプレゼンと水巻町総務課職員による講評

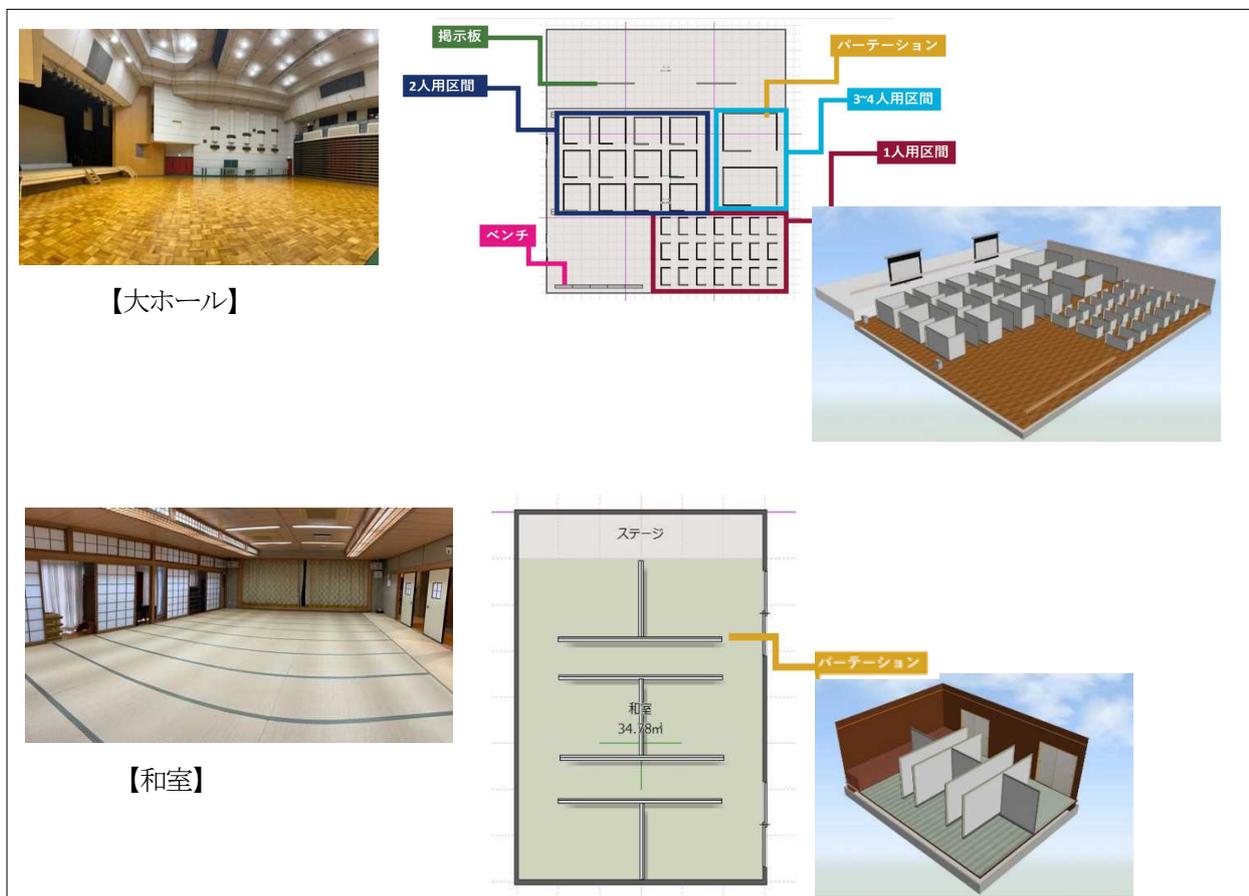


図4 公民館の実際と学生が考えたレイアウト原案